

早崎内湖再生に向けた取組について

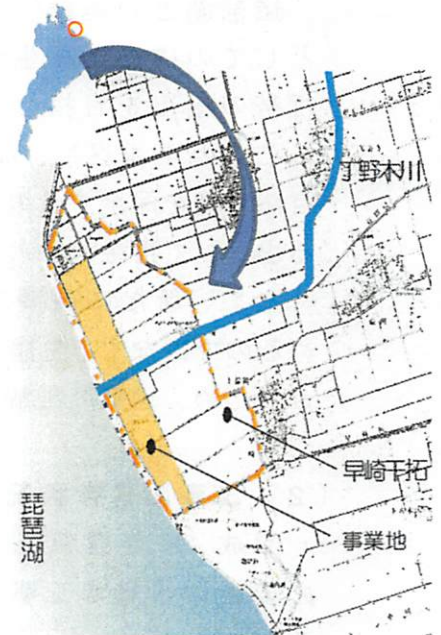
1 早崎内湖再生事業の概要

(1) 事業目的

琵琶湖の水質が各種施策の実施により一定の改善を見せている一方で、在来魚介類の減少という課題がある。その原因の一つとして、湖辺域の改変などによる、琵琶湖と内陸部のつながり（水陸移行帯）の分断が考えられる。

本事業は、そうしたつながりを再生するため、内湖再生全体ビジョンに基づくモデル事業として実施し、琵琶湖生態系の回復につなげることを目的としている。

平成13年から早崎内湖干拓地内の一部（約20ha）を試験的に湛水し、モニタリング調査した結果、在来魚類をはじめ多様な生物の生息が確認されており、内湖の再生が琵琶湖生態系の回復につながる可能性が高いことを確認している。



(2) 事業の進め方

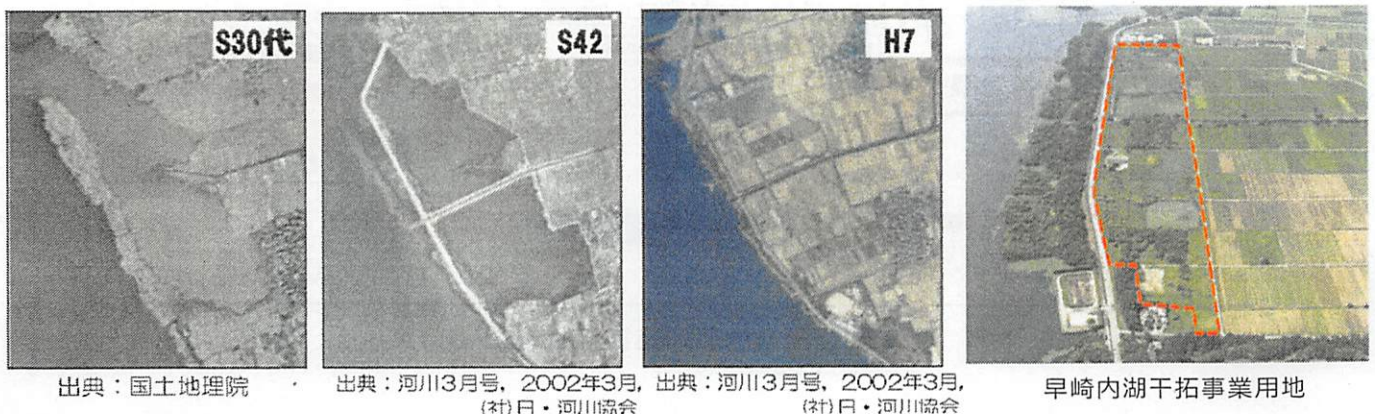
モニタリング調査の結果を受け、平成18年度より早崎内湖再生事業に着手し、平成25年度には用地（約20ha）の取得を行い、内湖再生に向けた工事を推進している。

内湖再生は、まず、野木川の北側区域（以下、「北区」と言う。）の工事をを行い、続いて、野木川の南側区域（以下、「南区」と言う。）の工事をを行う予定である。

北区は、令和7年度までに取水施設および内湖内部形状等の環境整備を進める予定である。

○平成30年度までの累計事業費 約931百万円※

※環境省 自然環境整備交付金（国費：45%、県費：55%）を活用



出典：国土地理院

出典：河川3月号, 2002年3月, 出典：河川3月号, 2002年3月, (株)日・河川協会

早崎内湖干拓事業用地

図. 早崎内湖 経年変化 航空写真

2 事業の実施状況

(1) 内湖再生工事

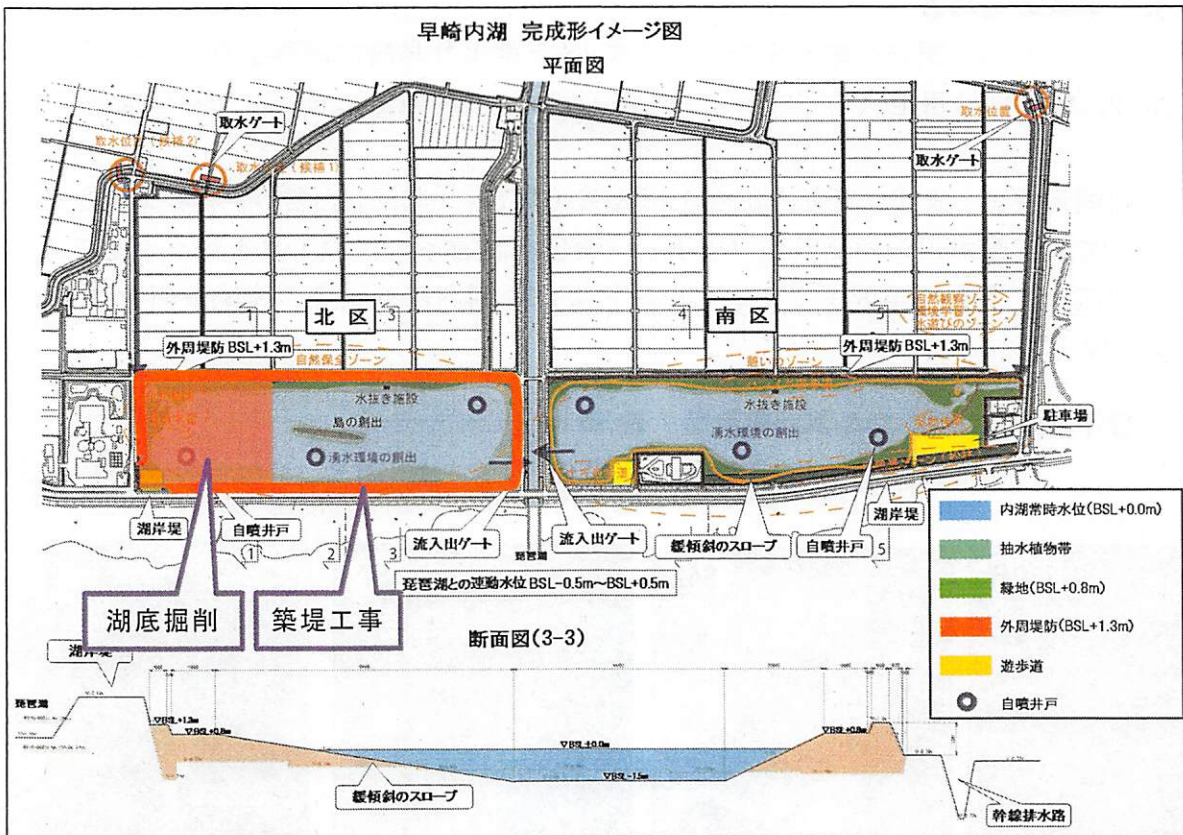
琵琶湖との連続性が確保された在来魚の産卵の場、稚魚・幼魚の生育の場としての機能を再生することを第一の目的として、内湖とその周辺の水陸移行帯の創出を目指している。

このうち北区は、なるべく人の手を加えず、魚介類の産卵、生育の場となるよう自然環境を保全する場として、また、南区は、内湖と人々との関係を再構築し活用する場として再生するのが完成形のイメージである。

なお、新たに内湖環境を作るという大規模な改変であるため、一気に事業を進めるのではなく、生態系の状態をモニタリングしながら順応的に進める必要がある。このため、地元の理解と協力を得て順応的な管理により実施する。

(2) 工事の進捗状況

平成 28 年度以降、北区において、琵琶湖と内湖の連続性を確保する上で必要となる築堤工事と内湖内部形状に関する工事（湖底掘削）を実施している。



(3) 生態系モニタリング調査結果

住民、NPOなどで構成する早崎内湖再生保全協議会や調査会社により、平成13年度から早崎内湖再生予定地（北区、南区）において試験的に創出した湛水域において内湖の生態系機能に関するモニタリング調査などを実施している。

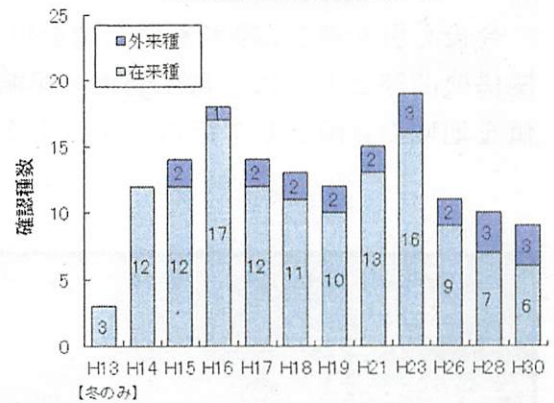
これまでの調査の結果、植物、鳥類などの豊かな生息を確認し、良好な生息環境が再生していることがわかってきた。

【調査結果概要】

①魚類

- ・丁野木川にゲートを設置し、北区と琵琶湖が接続された平成19年度以降、魚類の種数が増加した。しかし、平成26年度以降は、減少傾向にある。この時期は、湛水域でヒシやハスが増加し始めた時期である。
- ・湛水域では、フナやコイ、メダカ等が継続的に確認されている。外来魚は、カムルチーやブルーギル等が確認されている。

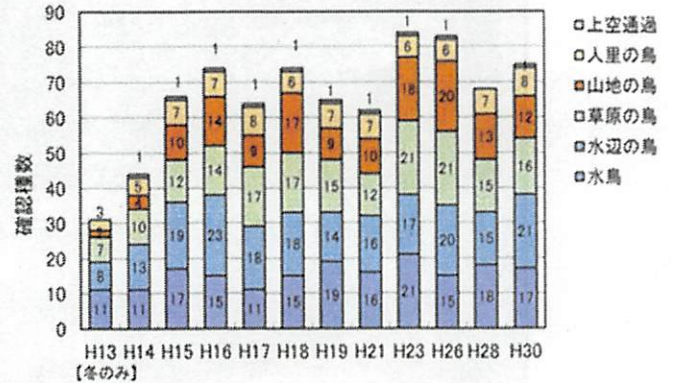
【魚類確認種類数】



②鳥類

- ・平成30年度調査において、湛水域では、コハクチョウやカモ等の水鳥が、湛水域周辺の草地では、スズメやツバメなどが確認された。
- ・これまでの調査から、湛水域周辺が鳥類の餌場や休息場として利用されているほか、繁殖場や、コハクチョウの越冬場所としても活用されていると考えられる。

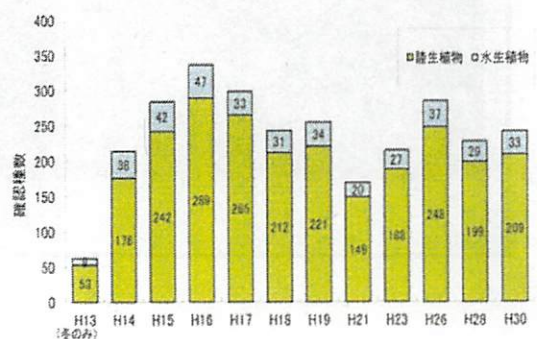
【鳥類確認種類数】



③植物

- ・水生植物、陸生植物ともに、平成13年度から平成16年度まで、環境の多様化や周辺からの侵入により種数を増やしている。
- ・水生植物については、近年、北区湛水域でヒシやハス群落が優占する状況に変化している。

【植物確認種類数】



また、地域住民や環境団体、関係機関等からなる「早崎内湖再生保全協議会」が主体となった地域主体型環境調査では、小学生や一般の方の参加も募った観察会等の形式で開催し、早崎内湖の価値の発信をあわせて実施している。



図. 観察会の様子

3 今後の方針

今後も引き続き、環境省の支援を頂きながら、地域住民をはじめとする県民、NPO、関係機関等とともに、再生過程の早崎内湖の生態系をモニタリングし、早崎内湖の価値を地域の資源として活用できるよう、早崎内湖の再生に取り組んでいく。



図. 北区工事現場写真（左：湖底掘削部、右：掘削状況）



図. 南区湛水域現状写真

【参考：内湖再生全体ビジョン】

内湖は古来、暮らしの中で利用されることで環境が維持され、琵琶湖固有の動植物、特にコイ科魚類を中心とした在来魚の産卵や仔稚魚の成育の場として重要な役割を果たしてきた。しかし、これまでに、内湖は暮らしの中で遠い存在になると同時に、干拓をはじめ様々な開発により、多様な機能を持つ多くの内湖が失われている。

内湖再生全体ビジョンは、改めて内湖の機能や価値を見出すことを出発点とし、内湖と琵琶湖の豊かな生態系を回復するとともに、内湖・琵琶湖と人とのより良い関係を築くための道筋を示すものとして、平成 25 年 3 月に策定した。

【内湖再生の基本理念】

「内湖の価値を再発見し、その本来の機能を再生し、琵琶湖や人とのつながりをつくる内湖づくり」

【内湖再生の基本方針】

内湖の有する以下の三つの価値を重視し、その機能の再生を進めることを、内湖再生の基本方針としている。

- 自然環境・生態系としての価値：生態系を育む機能
- 琵琶湖と集水域の緩衝地帯としての価値：流入負荷を緩和・浄化するなどの機能
- 人の暮らしを支える価値：生業や憩い、環境学習など人が利活用できる空間としての機能

【内湖再生に向けた課題】

- ・ 地域特性を踏まえた価値の再発見
- ・ 財源の確保
- ・ 制度上・技術上の課題
- ・ 持続的な取組の仕組み



図. 内湖再生に向けた取組イメージ (内湖再生全体ビジョンより)